

明日の近畿への提案

花博は、なにわの底力を見せる絶好のチャンス。昔から自然と人が創り出すパフォーマンスは関西のお家芸。

今回は、花の万博プロデューサーとして活躍され、関西不沈没論を提唱する小松左京氏をゲストに迎え、21世紀に向けて期待される関西への夢やビジョンを語っていただきました。

●作家／小松左京氏
●日本土木工業協会関西支部支部長／勝田悦之氏

花博のルーツは戦前から

勝田 70年万博らしいの関西の大イベント、花と緑の博覧会がいよいよ来年に迫ってまいりました。この機会に、総合プロデューサーという大役を果たされる先生に、直接、趣旨とか、意義、見どころなどをお伺いしたいのですが。

小松 鶴見緑地公園建設の計画は以外に古く、大阪市が昭和16年から手がけたという話しを聞いております。途中戦争で中断するわけですが、戦後は焼け跡の片付けからはじまって、ようやく昭和30年ごろから地下鉄沿線が整ってきて、ああいう緑地公園が完成したのが4、5年前なんです。そして大阪府が市制百周年を迎え、緑地だからなにか関連のあるものということで、10年に1回開催される花の国オランダの大きな花の博覧会「フロリヤード」を持ってこようということになったんです。そして話しがどんどん発展していった国際博になったんです。

勝田 昭和40年代の地下鉄工事残土処分地として記憶してはいましたが、なるほど、ルーツがそんなに古かったとは意外でした。

70年万博との違いを肌で感じて欲しい

小松 花博のテーマは最初「庭園と緑化」ということだったんですが、庭園だけではあまり人が集まらないだろう、投資効果もないということ、で、「花と緑」になったわけです。

今度の造園は非常に見事で、「山のエリア」、「野原のエリア」、「街のエリア」とあって真ん中に大池がある。花の博覧会ですから世界中から色んな珍しい植物、生物がやってくる。これを半年間メンテナンスしなきゃいけない、生きものですからこれがまた大変なわけ。

ところで70年万博と大きく風合いが違うところは、博覧会の大きさを見せるのではなくて、それを通じてなにを語るのかということなんです。70年万博には、月の石とか見せる物の目玉がありました。花博は「花と緑」がテーマですから、朝はやくから開館前に並んで一番にパビリオンに駆けて行くというのではなく、自然が語りかける自然と人間のつながり、環境問題などをじっくり肌で感じとって欲しいですね。

国際的意義の大きい花博

小松 昨今、海外との交流も、夏休みにはO.Lや学生、家族が気軽に海外に出て行く、そのかわりに向こうからもやってくるという時代になっていきます。それから70年のときにはデタントと言いますが本格的じゃなかった。しかしゴルバチョフが出て来て、これはもう本当に、やっぱり人類ってそうバカじゃないから本格的に取り組みははじめています。完全な

核デタントから一般軍備におけるデタントまでいくだろう、そういう時代に、次の人類的課題である「環境問題」に関連した花と緑の博覧会を開催するということは、もう日本がやる、大阪がやるといったちっぽけなものではなくて、世界の大事な行事の預かり物をするといったグローバルな考え方で取り組む必要があるわけです。

勝田 花博の果たす国際的意義はとも大いいわけですね。もう少しそのところを詳しくお聞かせください。



して、全部聞いてまわったんですが、とても素晴らしいので、このままじゃ勿体ないというわけで、野と山と町と水、そして空も使って、一つの思想をこめて、鶴見緑地全体を生かす大パフォーマンスをやってみたいと思いついて、いま計画中です。

勝田 江戸時代には小堀遠州が考案した庭園の中に、自然を借景して造形する独創的な造園技術がありますが、それをさらにスケールアップしたお話しで、とても楽しみです。

大文字の山焼き、観艦式が原風景

小松 いや、実は、こんなことは日本は昔からやっているんですよ。たとえば京都の大文

字の山焼き。都市を真暗にして、お盆という日を京都の盆地全体で迎えるパフォーマンス。戦前の大阪湾の「観艦式」、これは忘れられませんが、六甲山にいかりとプロペラのイルミネーションがつきましてね、あのときのイルミネーションは、六甲山の山腹に飛行機のプロペラが浮かびまして、そのプロペラが回りますよ。もちろん火花も上がりまして、それからライトアップもありました。これだけの仕掛けを昭和10年代にすでにやっているんですよ。関西には、昔からユニークなことをやる土壌があるんですよ。

勝田 なんだかワクワクするようなお話しですね、なんとしても花博は成功させたいですね。ところで関西の底力に話しが移ったところで、大阪生まれでいらっしゃる先生の関西論をお聞かせ願いたいのですが。



国際展示館A

※小堀遠州：安土桃山～江戸初期にかけて、建築や庭園の奉行。また、千利休、古田織部とともに三大茶人のひとり。

関西は、歴史的背景からしても、 外向きにエネルギーを 発散させるに適した位置にある。 復権は、地球規模の思考による可能性もある。

日本土木工業協会関西支部
勝田 悦之 支部長
大正12年大阪市生まれ。昭和21年京都大学工学部土木工学科卒。同年大林組入社、名古屋支店土木部長、札幌支店長、本店土木部長を歴任。昭和52年取締役、平成元年代表取締役副社長、昭和58年6月日本土木工業協会関西支部支部長に就任。

関東のいともびっくりした 大阪の町づくり

小松 おっしゃる通り、私は大阪西区の京町堀に生まれました。実は両親が関東大震災で焼け出されてこっちへ来たんですが、母親なんかは、もう東京なんかへちつとも帰りたくない。人情がいいし、町としても実にいいというわけです。
当時、大阪の関市長の市制というのは、地元にもすごい協力者がいましたから、地方行政としては大変思いました。でも、地方行政も何十年もつようにならなりました。しかも、風格も備わっていたわけですね。
たとえば、御堂筋ができて、地下鉄の駅がものすごく大きい。まだそのころは一両で走っていたんですけど、そして中之島のあいう風格のあるエリアづくりや大阪の再建に電気科学館、あのプラネタリアムは東洋で初めてだったんです。あれが市の予算で建てたんですから。
関東のいともびっくりしてしまっていたが。
小林一三さんの事業計画もすばらしかった。箕面有馬電鉄に目をつけて、神戸まで引張ってきて、宝塚に温泉をつくって日帰りで行か

地球規模の 思考力を養う

小松 しかし、関西新空港という24時間型の地球対応型の空港ができるわけですし、本四架橋、山陽新幹線、学研都市、明石海峡大橋、ウォーターフロント計画など、西日本が活気づいてきています。
私はもう遷都論なんて問題じゃないと思っており。都なんか来なくても、20年の間に世界情勢はどんどん変わってきている。東京や日本とかいう問題ではなく、国と国との関

係でもなくて、もう人類は地球規模で、どんどん出て行ったり、向こうからやってきたりする。世界の人間はもうどこでも通じているのですよ。
勝田 なるほど、先生らしいとらえ方ですね、東京や国なんかはもう小さい。関西の相手は地球だ。

小松 大阪という土地は、仁徳天皇や桓武天皇の時代から、歴史的に見ても、日本が国の中で閉じこもろうという時には、その中心には適していないのです。むしろ外へ向かって大きく開くという、色んなものを受け入れ、こちらからも出していくというときに、ここは歴史的に大変いいところなんです。そういう意味で、関西新空港の開設はとても大きな意義を持つてくると思います。

西日本は宝の山

小松 これから先、土木業界を含めて、関西は、地球世界の一部としてデザインしていかなくちゃならないと思います。私はいりリゾートエリアは、必ずいい知的生産エリアであると確信しています。
たとえば、国際会議をどこでやるかというときに、あそこだったら行くという場所が必ず二、三あるんですね。たとえばニースで、国際会議には行くけれど、俺はヨットが好きだから、あとはヨットで遊ぶという付加価値が出てきます。そういう自然風景のいいところを抱えているということは、これから先、大変な財産になってくる場所ですね。このように先に生かすプランを、地元の人と企業関係、工事関係、見識者が一緒になって是非考えていただきたい。西日本はそういう意味で、私にいわせれば宝の山を抱えているようなものです。



※関市長：関一、第7代大阪市長。
※小林一三：阪急電鉄創設者。



国際展示館A全景

これからの土木に必要なのは、国土美学。 そして地球社会の一部として 国土をデザインし、 風景を創っていく気構え。

勝田 先生のお話しをお伺いしていますと関西の未来が輝かしいものに見えて参ります。これからの関西は、東京よりむしろプロジェクトが山積しています。これからの関西がどのように発展していくか私も非常に楽しみに思っています。そこで先生の描く関西の未来像などを具体的に聞かせてください。

地域性を生かすのは 我われの責任

小松 発想は先ほども申しましたように、地球規模です。具体的には、リゾート開発ひとつをとってみても、戦後一時期、30年代の高度成長のときには、毒どくしい、安物の施設ばかりがその景色のいいところに建って、一方、国民宿舎では夜の9時門限で酒も飲めないなんていう、こういうことを繰り返したらもう未来はないんでね。もう少し地域の持っている潜在的なすばらしさをですね、これを生かすのは、これから先の我われの大きな責任だと思っております。

勝田 ごもつともです。リゾート地だけではなく、それは住環境にもいえることで、住環境の快適さもやはり自然とのかかわりが大変大きいと痛感いたします。

勝田 いや、それはおっしゃる通りでございますね。余りにも今までハードすぎたんじゃないかという反省は、我われの方にもあるわけですね。

小松 ある土木工事やってる人で、俺達は地球の芸術家だなんて言ってる人がいたんですけどもね。日本の場合、国土は狭いし、70%ぐらいが山ですからね、風景を美しく変えるという大きな夢を描いても、それはもう横からみても大変だということはよく分かるんですが、そのくらいの自負は持っているんじゃないですか。

勝田 日本はこれから心の問題が大切になってまいります。今度の花博でもやはり心と申しますか、自然とのかかわり合いで、そのふれあいを大切にするということが重要になってくるわけですね。

小松 そうですね。今まで土木建築関係は、経済的な必要性から成り立っていたので、あんまりシンボリックな効果、歴史的な美的効果という意識は少なかったんですね。これからはやはりそういう方面にも少し力をさしていただきたいと思っております。

花博全景



これからの土木は、 ソフトも重要な要素に

小松 日本の土木工事というのは、大体穴を掘るのが多いみたいなんで、河川と穴掘り、

勝田 そうですね。従来、特に土木工学的なものは、構造の方が主体でして、むしろ素朴さ、強さということに主眼が置かれていました。それに昔から治山、治水は国造りの根本になっておりました、またこれが土木技術者の職務だ、責任だと自負してまいりました。でもこれからは先生のおっしゃるように、美観といえますか、美意識といえますか、そういったことを頭に描いて計画、デザインしなければいけませんね。

土地は先人からの預り物、 なにをプラスして次代へ引き継ぐか

小松 瀬戸内というのは日本でも有数の美しい水辺にある町ですが、そこはたいして産業に乏しく活気がない。これがやはり近代というものだと思うんです。建設的に高度開発をやったら自然破壊されると。だけど、もうひとつ前の封建時代にあちこち残っている風景はなんともいえず美しい。そして自然そのままじゃなくて、ちゃんと管理が入っている。美林をマネジメントしてのこしている。いいところはいいところで風格が高くて、しかも経済的にもちゃんとしている。そういう時代が来ればいいと思うんです。私は可能だと思っております。この大阪という土地はですね、仁徳天皇の昔からここをいろいろ開いてきた先人からの預り物だと思うんです。これをどう未来へ、もつと美しく、そして愛する土地にして引き渡すかと。そういうひとつの責任が我われのところに来ているんじゃないかと。

勝田 なるほど我われの責任は重大ですね。

新御堂は70年万博の 大いなる遺産

小松 近い例としましては、70年万博の新御堂筋線があります。千里中央から箕面市の山



新御堂筋

に向かつて走る道路が、私は日本でも一番美しい風景じゃないかと思っております。しかも無料ですね。
あのときのデザインというのがそういう効果を見通していたのかどうかは知りませんが、我われの知っている範囲でそういうことができるとは、未来は明るいんですよ。
勝田 そうですね。あの万博をやったところは、後にこれだけの大きな財産になるとは思いませんでしたね。
小松 ひとつの成功例があると、次にチャレンジしようという気持ち湧いてくる。もつともあのころは、風景よりも土地の経済効果の期待の方が大きかったようなんですが、24時間空港も開港するわけですから、それを臨空タウンに、グローバルエンジニアリング研究センターみたいなものをおつくりになつたらいかがですか。
勝田 それこそ地球規模でね。本日は斬新なご意見を承りましてありがとうございます。これからの土木業界の発展に大いに参考にさせていただきます。
花博の成功と、先生のますますのご活躍を期待しております。

作家 小松 左京氏
昭和6年大阪市生まれ。昭和29年京都大学文学部イタリヤ文学科卒。経済誌「アトム」の記者を経て、昭和38年発足のSF作家クラブに参加。作家活動の他、日本万国博をはじめ数多くの博覧会等のビッグプロジェクトに幅広く活躍。昭和63年「花と緑の博覧会」総合プロデューサーに就任。著書、「日本沈没」「愛活の日」「首都消失」他多数。

